

シカゴ大学歴史学科とアメリカのビザンツ学

——留学記(2001.9—2003.3)——

草生 久嗣

ワークショップ後の片づけを終えたホールで、院生のセシリーが「ニケタスが、ニケタスが」と言っている。「ねえ、『ボドリーノ』読んだ？ニケタスが出てくるの。もう感激しちゃって…。ロブは読みましたか？」『ボドリーノ』は昨年英訳が出版されたウンベルト・エーコの小説¹で、『薔薇の名前』同様の中世文化を扱っている。プレスター・ジョン伝説をメインに、1204年のコンスタンチノーブルの略奪、神聖ローマ皇帝フリードリヒや当時のパリ大学、柱頭聖者などがモチーフにされている。ニケタスとは、ビザンツ帝国コムネノス朝期について歴史書を残したニケタス・コニアテス(1155-1215/6)で、『アレクシアス』を記した皇女アナ・コムネナ(1083-1153)と並ぶ重要な歴史家である。しかしビザンツの専門家以外にはさほど知られていないだろう。ニケタスは小説中、主人公のボドリーノに侵略者ヴェネチア人の暴虐から救い出される。

隔週に開かれる「古代末期・ビザンツ研究ワークショップ」は、ビザンツの考古学・美術史・歴史学者の合同研究発表会で、院生や遠方から招いた研究者に報告をしてもらう場である。報告者はCV(Curriculum Vitae、履歴書)を検討した教授たちによって決定されるが、院生が博士論文の経過報告の場に使う場合もある。また、立ち寄った英国の学者に報告を依頼したこともある(John Haldon氏、Jonathan Shepard氏、Jas Elsner氏ほか)。美術史科の院生で学部講師も勤めるセシリーはネットワークを生かして報告者との渉外を担当し、私は広告や提出書類の作成、問い合わせの対応を請け負っている。会場のセッティングでは他の院生たちも手をかす。普段忙しくて会えない彼らがそこで久しぶりの再会を果たし、ひとしきりお喋りするのである。

美術史の院生たちはネルソン先生(Robert S. Nelson:ビザンツ美術、後期装飾写本)を「ロブ!ロブ!」と呼ぶが、私は教授たちを敬称抜きでは呼べないでいる。歴史学科の院生の多くは、たとえ友人同士の会話であっても教官名には「ドクター」や「プロフェッサー」をつけているようだ。ちなみに私の指導教官にあたるケーギ先生(Walter E. Kaegi Jr.:ビザンツ史、ビザンツ—イスラム関係史、軍事史)は、同僚の教師からも「ヴェネラブル・ケーギ」などと称される具合で、「プロフェッサー」としか呼んだことがない²。こういう話題のとき、私は自分がビザンツ史のプログラムにいると自覚する。たしかエーコはニケタスが学者と廷臣としての生活で太ってしまっていたと書いていた。エーコはウィーン写本の著者像も見たのだろうか、などと考えながら³。

シカゴ大学歴史学科大学院博士課程(前期)のビザンツ史プログラムに在籍し、約1年半が経過した。前期課程はコースワーク(規定単位の履修)と語学などの資格試験のパスをもって修了し、博士論文題目申請(Proposal)以後の後期生(Advanced Student)とは区別される。大学院生活においてはこの前期課程が最も忙しく、先輩たちに言わせると「悪夢」のよ

うな日々なのだそうである。私も一年目（通称 First Year）は、初めての海外生活の上にプログラムが与える課題が多いため消耗した。年度の終わりの春学期のあとには、自由選択の夏期講座参加の気力すらなくなっていたように覚えている。もっとも二年目に入った現在も相変わらず課題に追われ、昼も夜もない日々が続く。例えばこの原稿は、締め切りが迫ったセミナーペーパーの執筆と、同じく試験が近づいたフランス語、ラテン語の対策、個人指導のセミナーで出された読書課題の消化の合間に執筆された。

とはいえ図書館の一隅と教室と、自分の部屋以外何も知らないといった状態でもなくなり、周囲に対して自覚的になってきているのも事実である。本誌編集部による本稿執筆の依頼は、私がまさにその状態にあることを踏まえたくて、今こそできるような現場の報告をしてほしいという意図に発していたと思われる。ただ今の私には、プログラムをこなしてきた以上の「留学体験」には乏しく、これからいくつもの試験を受ける前の段階で「手引」の類を執筆することができない。しかも困ったことに、はじめてのアメリカ暮らしのはずなのに、かつて同様の生活をしていた時のことが思い出されてしかたがないのである。一人暮らしをしつつ、遅くまで図書館⁴やキャンパス内の喫茶点⁵におり、キャンパスから歩いて5分のところに住んで寝るためだけに帰る、という現在の生活パターンは、まさに日本の学群（学部）生時代のそれとなんら変わらない。しかしながら幸い私には留学前に日本で院生として活動してきた経験があり、院生たちの生活や専門分野（ビザンツ史）の動向についてシカゴでのそれと比較してみることもできそうである。

私が留学先にアメリカの大学院を選んだのは、後述するように専門分野においてアメリカが興味深い場所であったためである。アメリカの大学院の様子について西洋史学の現役研究者では、東京大学の高山博先生（西洋中世史）がイェール大、静岡大学の澤田典子氏（古代史）がカリフォルニア大・パークレー校についての体験記を発表されている⁵。かつてそれらを読んで、私がイメージしたアメリカの大学は、授業料は高いなりに「商品」としての指導は提供してくれるらしい、というものであった。指導が厳しいのは高額な授業料の対価として当然と思われた。シカゴ大学の私の今いる状況に関してはこれらの評価は間違っていないと思う。具体的な準備をはじめたのは、留学の3年前からである。私はその時点ではドイツへの留学も視野に入れており、実際、シカゴ大の合格通知を受け取る時期の前後までドイツ語会話の講座にも通っていた。ただ私は修士論文をもとにした論文の活字化を何よりも優先していたので、実際に動き出したのは、その原稿掲載が約束されてからだった。シカゴを第一希望として教校に出願したが、学校選びでは事前のインタビューや学校訪問はしていない。幸い優れた教師たちと勉強環境であったからよかったものの、普通はきちんと事前調査をすべきところである。指導教官となるケーギ先生と初めて出会ったのは、渡米の直前に訪れたパリの国際学会の会場であった。ソルボンヌ脇のカフェで授業の履修のあれこれを教わった。シカゴ大の生活面での具体的な情報はGSB（ビジネススクール）有志が詳細なガイドをホームページで提供してくれていた⁶ので、ずいぶん参考になった⁶。当時も今も痛感することは、アメリカの大学・大学院は学校によって何もかもが多様ということである。どの学校も大体同じだろうと思っていたことで、裏切られなかったのは、たくさんの課題に押しつぶされそうになる日々だけだった。

2001年の秋学期の開始3週間前（9月1日）に渡米し、キャンパス内の International House

内で開催された英語集中講座に参加した。歴史学科がその費用を負担してくれていたからである。この講座は表向き英語講座であるが、英語の授業と並行しつつ、シカゴ暮らしについての基本情報を提供し、銀行口座の開設や学生証の入手、ソーシャルセキュリティー番号の一括申請・取得までを面倒見るといった生活基盤の整備が目的のようだった。

英語での苦労は尽きないが、着いた当初困ったのはやはり店のカウンターなどである。聞き取りの問題というよりは生活表現の知識がないのである。「(商品を) コンビニ袋に入れるか、紙袋か」という質問を“Plastic or Paper?”とされ、何のことか気づかずとまどったりした。キャンパスや店舗でスタッフから突然“How are you?”と声をかけられる。そして言った当人はろくにこちらを見もせず、さっさと立ち去ってしまう。見知らぬ人同士の場合日本で言うところのおじぎや「こんにちは」くらいの挨拶なので、“Fine.”や“All Right.”などと返しておけばよかったのである。

話すほうでも教授の名前である Woods の発音がうまくいかず、本人が顔を出すまで取次ぎの秘書と押し問答をしていたことがある。W 音では呼気が一瞬強く吹き出されなくてはならないのである。ちなみにその John Woods 先生(中世イラン史)はジンギスカンではなく「ジェンギスカンあるいはゲンギスカン」の墓を発見したかもしれないとして有名になった。書き言葉では古風な先生に「前置詞句あるいは副文で文章をはじめない」や「受身形は一切使わないように」と注意され、日本語思考に釘を刺された感じがした。

シカゴ大学は、大学院生が学部生の倍以上いるという研究者養成大学として堅実な姿勢を保つ。現在の米国社会学の基盤をつくった社会学科、ノーベル賞がなければ教授になれないなどと謳われた経済学科、ロー・エコノミクスという分野の先駆となった法学部は特に人気がある。アメリカ最大規模の大学病院を擁してアメリカ中西部全体の高度な医療を引き受ける。なお物理学者フェルミの研究拠点として原子爆弾を世に産みだした「業」を背負った大学でもあり、ルネサンス学の異才 I.P. クリアヌ⁷が暗殺による非業の死を遂げた現場でもある。

シカゴ市南部は貧しく、以前ギャングの横行で荒廃した結果、危険地帯などと称される地区がある。大学のあるハイドパークはその中であって陸の孤島の様相を呈する。1 マイル四方に満たない小さな区画ではあるが、その厳重な警戒によって「アメリカで一番速くポリスが来てくれる場所」となっていると聞いた。シカゴ大学はよく「危なさ自慢」でハーレム地区を背後に控えるニューヨークのコロンビア大学と比べられるが、コロンビア大学は内庭も含めたキャンパス全体があたかもビルディングのように管理された空間であり、キャンパスと街は物理的に隔てられている。一方シカゴ大はキャンパスだけを囲うような塀がないので学生の住居区も含めた地区全体での治安が果たされているという違いがある。ハイドパーク地区は昔から地価の高い高級住宅街でもあったため飲食店や娯楽施設の進出も鈍い。この点、シカゴ北部エヴァンストン地区にある名門ノース・ウェスタン大学と大きく異なっている。

シカゴ大学はクォーター制なので、一学期 11 週間しかない。そしてそれぞれに中間・期末試験・ペーパー(小論文)の提出課題があるため、学生は忙しい思いをする。人文・社会分野は読ませることに重点をおき、シラバスはそのテーマについての長大な文献目録の様相を呈している。宿題の量(大学院)について教師は大体週 350 ページを超えないように工夫していると聞いた。はじめての学期に参加した Rachel Fulton 先生の「修道制」のゼミでは、ミニ・ペーパー課題が毎週だされ、週末は読書課題とともにそれをこなすのにつぶれてしまっ

た。ゼミでの議論は、英語さえ自由ならば生産的で面白かろうと思われる。しかし現実には日本語でも難しいことをするのであるから、聞き取れない点や発言も伝わらないことが多かった。同級生には「宿題全部読んだの!?!」と変なところで感心され、「ノートを作ってきました」というと「私が大量の宿題を出すのは、その中にほんの少しずつ埋まっている大事なポイントを見つけてきてほしいからですよ。」などと注意されたりした。

Paper 課題が出された場合、執筆の課程で教官とオフィスアワーに何度か足を運んで相談する。あらゆるライティングの課題において、私には書いた文章を満足に推敲するひまがないのが一番の悩みの種であった。イスラームの異端学とビザンツのそれを比較したペーパーをウッズ先生に出したとき、内容のレベルは高いが英語の作文作法をもっと身に付けなさいと諭された。日本の大学で学期末に課される「レポート」課題は、こちらの Take Home Exam にあたるだろう。教室での筆記回答を求める In Class Exam では、Identification Section (語句説明や事項説明) が厄介で、授業でやったことを暗記していかななくてはならない。二百枚以上のスライドを提示したネルソン先生の授業の学期末試験では「Kariye Camii の Koimesis のモザイクは nave の西壁にあり、それは 1315 年から 1320 年ごろの作成」などといちいち覚えなくてはならなかった。特に写本の名称 (Cod. Vat. gr. 666 などといった所蔵番号) はその作品に親しんでないと頭に残らない。自分が美術方面の勉強を怠っていたことを痛感した。Michael Allen 先生のラテン古文書学は、日本で大学院に入りたてのころ院生同士で解読練習をした経験があったので、こなすことができた。

大学院歴史学科は数十を越す教官と総勢二百名を越す院生 (半数以上が大学に身分だけを置いている後期生) で構成されるアメリカでも有数の大所帯である。それでもプログラムが細分化されているため、指導も教官一人に対して数名以下になる。

その歴史学科が院生に特別に履修を指示するのが 2 学期連続のセミナーコースである。このセミナーコースは秋学期に関連図書を読み、皆で議論して自分なりの問題関心を養う Reading Seminar と次の冬学期でそれを文章化し学期末に提出する Writing Seminar で構成される。最終的には雑誌掲載レベルの論文 (セミナーペーパー) を仕上げることを目的とする。50 枚から 100 枚 (ダブルスペース) の枚数で仕上げ、その最終稿提出までに題目申請 (Proposal) ・下書き (Draft) といった提出物が課せられる。指導教官は提出物を見て随時進行をチェックしている。博士課程生としての能力を問われる重要な課題なので、院生たちはこの執筆を年間のメインイベントとしている。単純に計算すると 2 学期間 6 ヶ月のうちにゼロから論文を一本書き上げなくてはならず、文献調査の進行状況や段階に応じて指導教官からやり直しを命じられることもあるので、時間はいくらあっても足りない。

セミナーペーパーの次に学部が課す大きな試験は、博士論文フィールドの口頭試問である。First Year を修了してから院生は、将来の博士論文の審査委員会を形成する教官 3 名 (チェアは指導教官) を探し、彼らのもとでの Third Year に予定された口述試験を受ける用意に入る。具体的には試験の課題図書を教官たちと相談しつつ読んでいくのである。この相談の繰り返しでその分野の主要文献やトピックなどについて理解を深めていく。一科目平均 30 冊が課される。先輩がたくさんいる分野では、彼らが作った文献目録を差し替える程度で自分用のものをあつらえることができるが、幸か不幸か私の 6 学年上のビザンツ史の先輩はそれを公開していなかったので、一から自分で探さねばならなかった。先生がすべてあつらえて生徒に

渡すというケースもあるらしい。そのほかにプログラムごとに科目が決められた大学主宰の語学リーディング試験を受けて合格しておかねばならない。

中世史研究においてアメリカ学会はヨーロッパの地元学会に対していささか宣伝不足の感があるらしいが⁸、アメリカは世界のビザンツ研究の拠点のひとつである。首都ワシントン D.C.にある Dumbarton Oaks Institute、学会としては年次総会を主体とする BSC (Byzantine Studies Conference) などをメインに展開している⁹。ネット上にも最近ノース・フロリダ大に就職した P. Halsall 氏が、フォーダム大の院生時代に作成した巨大なリンク群がある¹⁰。ただ歴史学会として米国内最大規模で開催される AHA (American Historical Association) には、今年1月(於シカゴ、ヒルトンホテル)の様子ではあまりビザンツ関係の報告は立たなかった¹¹。

ダンバートン・オークス研究所のリスト¹²が示すようにシカゴ大学はビザンツ学のプログラムを持つ学校である。歴史学科のビザンツ史プログラム(ケーギ先生)は中東学の NELC (Fred Donner 氏、Cornell Fleischer 先生、John Woods 先生) および美術史料(ネルソン先生)と連携をとる。もちろん西洋中世史(フルトン先生)、古典古代史(Richard Saller 氏、Jonathan Hall 氏他)との接点も緊密である。現時点でのビザンツ学プログラムの院生は圧倒的に美術史(および考古学)専攻者が多い。ネルソン先生は多数の優秀な博士と教師を育ててきた。ダンバートン・オークス研究所所長の Talbot 氏は、私にそのことをはっきりと言われたものである¹³。

ビザンツ史を専攻する院生は、後期課程では履歴書を飾る仕事やフェローシップを探す。TA に応募して授業の補佐をすることからはじまり、その後美術史や考古学の院生たちは、ギリシャ・シリア・イスラエルなどに滞在して、事実上の「留学」を2年ほどしているようだ。TA の職務は多様だが、学生からの提出課題の下読み、教授によるレクチャーセッションとは別に設けられたディスカッションセッションの司会などを行っている¹⁴。ダンバートン・オークス研究所が提供する Junior Fellowship を得た場合、1年間、美しい庭園のある同研究所への出入りと所蔵資料の使用をゆるされる。フェローたちは、先輩のフェローすなわち世界各国に散らばる第一線の研究者に認知されるので競争率が極めて高い。その2年から3年の留学および在外研究を終えると、大学に戻り大体2年以内に博士論文を書き上げる。その期間、日本の院生たちと同様に、彼らは多くの学会発表や Job Talk をこなし、非常勤講師を渡り歩く。ただし論文の活字化は博士論文が仕上がってからというケースが多いようだ。博論の仕上がる前後に、幸運なものは助教授としてオファーを受けそれぞれの職場に去っていく。

Job Talk とは、研究者の就職活動に際して公募の最終選考で行われる公開のプレゼンテーションである。彼らにとっておそらく研究者人生で何度か繰り返される最も緊張するプレゼンであろう。院生たちもまた「お茶の席」を別途設けて候補者を対応する。このときの会話や雰囲気などは、採否決定権を持つファカルティにすべてきちんと報告される。就職活動の一風景として興味深かったのは、AHA (アメリカ歴史学会総会) では就職事情に関するセッションが多く開催され、ヒルトンホテルの会場には実際に願書を取り付ける学校の出先の窓口が設けられていたことである。常勤講師 (Assistant Professor) として採用されてもデニュ

ア(終身在任権)を取得するまでが大変で、昨年中世史のフルトン先生は大著を上梓して¹⁵、また中世ラテン語学のマイケル・アレン先生は長年手がけてきた原典校訂版を出版し¹⁶、テニユアを申請された。その一方でシカゴ大学に限らず、アメリカの学術基金は研究者の活動を評価して褒賞するに惜しみない。ケンブリッジ大古典学とハーヴァード大政治学の二つの博士号を持ってシカゴで教鞭をとる Danielle Allen 氏(古典学 Associate Professor)¹⁷はマッカーサーファンドの50万ドルの奨学金を得て話題になった。彼女はシカゴ大のカレッジ教官として最優秀と表彰もされるばかりか、大学外の地域教育活動にも専念している。私と同一歳ながら才能を活かし、仕事をこなすそのエネルギーには感服させられる。

昨今のアメリカビザンツ学会で注目された出来事は、2冊の大著にまつわるものであった。ハーヴァード大の Michael McCormick 氏が初期中世経済史についての著書を出版したこと¹⁸、およびセント・ルイス大学の Warren Treadgold 氏が数年前に出したビザンツ通史書が世界的に有名な学術誌で酷評されたことである¹⁹。マコーミック氏は凱旋式図像学などを扱った名著で知られ、ハーヴァードで古文書学などの教鞭を取ってきた人物である²⁰。パリ国際学会でのあるセッションで、前学会長の G.ダグロン氏や I.シェフチェンコ氏らが立ち会う中、マコーミック氏がペーター・シュライナー氏(ケルン大教授。現国際学会長)と、フランス語で身振りも豊かに丁々発止と議論をしていた姿は、印象的であった。ケーギ先生は近々同じ出版会からヘラクレイオス帝についての著書を出すので出版事情には詳しくはあつたはずだが²¹、よもやマコーミック氏から、このテーマでこんな分厚い本が出るとは思わなかったそうである。およそ1100ページ。しかも値段は70ドルを切るという安さで読まれないうちから話題になった。専門の書評が待たれるが、米国ビザンツ学会では昨今経済分野が注目をあつめており、近年もダンバートン・オークスから大部のビザンツ経済史論集が出版されている²²。マコーミック氏の仕事は、それを象徴するものといえよう。

もうひとつの「事件」は、1997年にトレッドゴールド氏が出した通史『ビザンツ国家・社会史』にまつわるものである。現在のビザンツ学の規模は個人による通史叙述に決して収まりえないのは周知の事実で、素人研究者として全く相手にされていない John Norwich 氏²³などをのぞけば、通史書はオストロゴルスキーの教科書ぐらいしかない²⁴。そのオストロゴルスキーすらも今や多くの研究蓄積により、ケーギ先生が最近の原稿で断じているように時代遅れの感が否めない²⁵。その一方で、著名な学者たちが一般向け小通史を細かく出版するのでビザンツ学の現状の到達点が見えにくくなっている²⁶。昨年出版されたオックスフォード版のビザンツ史も同中世史と同じく、通読用で学生のペーパーの材料にはならない²⁷。英国のジョナサン・シェパード氏が音頭を取り、数年のうちにケンブリッジの講座シリーズに「ビザンツ史」が準備されているのは、こうした状況の打開を意図したものだろう。現行の「新ケンブリッジ中世史講座」に収録された論文を集め、シェパード氏やケーギ先生他の原稿を足して一つのシリーズに独立させるとのことである²⁸。

その中でトレッドゴールド氏はあえて通史書執筆を試みる価値があると判断されたようだ²⁹。果たしてトレッドゴールド版通史への5年越しのブランデス氏による書評は、まれに見るほどの長文かつ完全な酷評であった。しかも書評原文のドイツ語を、著名な学者のジョン・ホールドン氏に英訳させ、それをドイツで発行されている有名専門誌に載せるといふ念の入れようである。委細は省略するが、通史叙述の弱点を的確に突いたものであったといえる。

トレッドゴールド氏といえば保守的な論争肌としても知られ、昨年も「アメリカのビザンツ学は1970年代以降、低迷の一途をたどっている。とくに古代末期学がピーター・ブラウン氏（プリンストン大）たちによっておかしくなった」といった旨の論評を発表して注目を集めた³⁰。この論評には「それほどブラウン氏が悪く言われるいわれはない」という反論が出たが、これについても返す刀でブラウン氏の仕事でビザンツ「非」専門家に由来する Postmodernism が問題と言ったのであり、「自分の論には何ら不正確なところはない」と締めくくった反批判を載せている³¹。当の通史批判が公表された後も同氏は直ちに長文の反批判（未発表）を執筆された由、紆余曲折を経てそれがケーギ先生のところにも届いた。ケーギ先生はトレッドゴールド氏の先著『ビザンツとその軍隊 284-1081』を「根拠となるデータが不正確で使えない」と断じていたこともあり³²、問題の反批判上でも言及された縁があるのだそうである。先生は「ヴェロニスさん³³のように著書を出し、批判を受け付け始めてから十年もたってまとめて反批判するという人もいるが...少し感情的すぎるな」と事の顛末を話してくれた。そして、「もしかしたらその後の展開があるかもしれないから」とミズーリ大の M. Rautman 氏が主宰するビザンツ研究のメーリングリスト (Byzans-L) を紹介された。もし事態が大きくなればビザンツについてまとまった知識を得たい人たちのための、通史叙述への関心を刺激するだろうとのことである³⁴。ケーギ先生が私に注目を促したのは、問題の通史がビザンツ講義で基本的な課題図書となるタイプである以上、教材研究を重視するアメリカの学者は、こうした事実も知らなくてはならないと考えたからであった。

トレッドゴールド氏の動向やマコーミック氏の印象が物語るように、研究者の雰囲気来接する機会は、私には重要なことと思われる。もちろん直に接したと言っても学会や報告といった公式の場では、その雰囲気も普段どおりではないかもしれない。しかし研究者本人の仕事を、言動とともに見知った場合、肯定的にせよ否定的にせよそれから一步引いた見方ができるようになることは事実である。それまで文章とテレビでのインタビューでしか知らなかったが、やはり本人の印象が強烈だったのはカルロ・ギンズブルク氏 (UCLA) である。彼は、シカゴ大に編集部のある *Critical Inquiry* 誌の招聘で冬学期の前半 5 週間だけ Visiting Professor としてマキャベリの講座を開いた。私はそのセミナーには参加できなかったが、2度の公開講演には顔を出した。彼は独特の風貌とイタリア語訛の強い英語で自分のアイディアを面白そうに語り、特に質疑の場面になると生き生きとして、答えを返すのである。

シカゴ大学への留学は、私にとって間違いなく幸いな機会のひとつである。日本にいたときから私が考察を進めてきたテーマや関心についても、シカゴ大のコースワークは文献収集や理論的枠組み、基礎知識習得の場を提供してくれている。しかしながら日本での経験がなければ、たとえ今ここにいたとしても得るものは少なかったと思う。冒頭に触れたように私はワークショップのコーディネーターの世話役に任じられている。おそらく日本で同様の経験をして研究者の雰囲気を知ることについて自覚がなければ、この仕事もコースワークの上に課された労苦としか感じる事が出来なかつただろう。

ただし忘れてはならないのが、この機会は出資者を含めた親愛なる協力者たちによって与えられたものだということである。彼らは日本ででもシカゴでも常に大事な局面で私を助

けてくれた。あのとき彼らがいなかったら自分がどうなっていたか分からない、といった感覚を幾度も味わったものである。多様な困難をあわせもつプログラムのさなかにあつてその続行をどこまで許されるかはわからないが、彼らに対して私は多くを負っているのであり、こうして今現在の報告をすることで感謝にかえたいと思う。(2003年2月末日)

(補記) 本誌 10/11 号 (1996/7 年) に掲載された拙稿「ビザンツ研究の道具箱」については改訂補筆版を私家版 (東大西洋史学研究室) として作成してきております (現在休止中)。後日機会が許されたら更新版を公開する予定ですが、現行の記載情報についての不備等、ご容赦ください。

《註 釈》

- ¹ U. Eco, *Baudolino: a Novel*, translated by W. Weaver (N.Y., 2002).
- ² 本稿では「先生」を私がかつて教室で指導を受けた人物について用い、それ以外の人には「氏」を用いる。
- ³ Vind. Hist. gr. 53, f. iv., I. Spatharakis, *The Portrait in Byzantine Illuminated Manuscripts: with 182 illustrations* (Leiden, 1976), pl. 95.
- ⁴ シカゴ大学は図書館を 24 時間運営していない (8:00AM-1:00AM)。学期休みともなると早々と夕方にも閉館してしまう。
- ⁵ 高山博「米国大学院における歴史学 PH.D. -A Letter from Yale, 1-」『クリオ』3号 (1988) 39-57; 「米国大学院生活 -A Letter from Yale, 2-」『クリオ』4号 (1989) 68-79. 澤田典子「アメリカ留学日記 (上) (下)」『かいほう』57号 (1996年) 3-6; 「アメリカ留学日記 (上) (下)」同 58号 (1997年) 1-2.
- ⁶ Chicago GSB J-Book (<http://gsbwww.uchicago.edu/student/capj/japan/>)
- ⁷ ヨアン・P・クリアヌ (クリアーノ) については、エリアーデとの共著『エリアーデ世界宗教事典』奥山倫明訳、せりか書房 1994 年、および、主著『ルネサンスのエロスと魔術』桂 芳樹訳、工作社、1991 年などを参照。
- ⁸ ロヨラ大の Barbara Rosenwein 氏から、フランスの中世史研究サイト (<http://www.ccr.jussieu.fr/urfist/omedirht.htm>) でのアメリカ項目の充実の手助けを要請する回覧が回ってきた (2003 年 2 月)。
- ⁹ Dumbarton Oaks Institute (<http://www.doaks.org>) BSC 公式サイト (<http://www.byzconf.org/index.html>) なお、後進育成のための努力の一環として、大学院でビザンツ学専攻を目指す北米の学部生相手に Bliss 基金が設置されている。
- ¹⁰ P. Halsall 氏のビザンツサイト (<http://www.fordham.edu/halsall/byzantium/>) には著作権切れの英文テキストの集成と、その他の情報仔細が掲載されている (但しリンク切れ多し)。同氏は古代末期史メーリングリスト (LT-ANTIQU) を主宰するサウス・キャロライナ大の R. Mathisen 氏と並んで電子情報処理のエキスパートである。
- ¹¹ 別のセクションでは、日本の昨今の教科書問題を研究する Ethan Segal 氏がセッショントークをされた。
- ¹² プログラム (<http://www.doaks.org/gradsch.html>) しかし同リストを見ても明白なように決してビザンツ学に在籍する院生の数は多くない。執筆中の博士論文については (<http://www.doaks.org/byzdiss2.html>) 参照。
- ¹³ ケーギ先生の紹介を受けて、2002 年 9 月同研究所を訪問し Alice-Mary Talbot 氏との面会を果たした。研究所は蔵書があふれるので、近々本を移送しなくてはならず、恒例の夏期講座 (中世ギリシャ語や古銭学など) も一時休講になるかもしれないことなどを伺った。
- ¹⁴ 歴史学科に限っていえば、学部生が多い学校では前期課程学生で TA を行うところが多いが、シカゴでは口答試験を終えた後期生が行うのが一般的のようである。

- ¹⁵ R. Fulton, *From Judgement to Passion: Devotion to Christ and the Virgin Mary, 800-1200* (New York, 2003) .
- ¹⁶ *Frechulfus Lixouiensis (824-850)* , *Opera quae supersunt*, edited with an introduction by Michael Idomir Allen. *Corpus Christianorum, Continuatio Mediaevalis*.
- ¹⁷ 著作として D. S. Allen, *The world of Prometheus : the Politics of Punishing in Democratic Athens* (Princeton University Press, 2000) .
- ¹⁸ M. McCormick, *Origins of the European Economy* (Cambridge, 2001) .
- ¹⁹ Review of “Warren Treadgold, *A History of Byzantine State and Society*” (Stanford University Press, 1997) by W. Brandes, *Byzantinische Zeitschrift* 95-2 (2002) , 713-725. なお書評者の Wolfram Brandes 氏は最近、中期ビザンツ経済史の大著を刊行している。 *Finanzverwaltung in Krisenzeiten. Untersuchungen zur byzantinischen Administration im 6.-9. Jahrhundert* (Frankfurt am Main, 2002) .同じく中期を専門とする Treadgold 氏への批判は、その知見に裏付けられている。
- ²⁰ M. McCormick, *Eternal Victory : Triumphal Rulership in Late Antiquity, Byzantium, and the Early Medieval West* (Cambridge, 1986) .
- ²¹ W. E. Kaegi, *Heraclius, Emperor of Byzantium* (Cambridge 2003) (forthcoming) .
- ²² Angeliki E. Laiou et al eds., *The Economic History of Byzantium: from the Seventh through the Fifteenth Century*, <http://www.doaks.org/EHB.html>.
- ²³ J. J. Norwich, *A Short History of Byzantium* (New York, 1997) 他。
- ²⁴ ゲオルグ・オストロゴルスキー『ビザンツ帝国史』和田廣訳、恒文社、2001年。
- ²⁵ W. Kaegi, “The Byzantine Empire,” *New Catholic Encyclopedia*, second edition (Washington D.C., 2003) , 789.
- ²⁶ たとえば M. Angold, *Byzantium : the Bridge From Antiquity to the Middle Ages* (New York, 2001) , W. T. Treadgold, *A Concise History of Byzantium* (New York, 2001) , J. F. Haldon, *Byzantium : a History* (Stroud, 2000) .
- ²⁷ C. Mango, *The Oxford History of Byzantium* (Oxford University Press, 2002) .
- ²⁸ 同じくケンブリッジ講座ではトルコ学の Cornell Fleischer 先生が編集する「トルコ史」も計画中である。なおトルコ学者の総力を結集した『トルコ史』の大叢書が出版された。英語版(トルコ語原典の縮刷英訳版) *The Turks*, edited by Hasan Celal Güzel et ali, 6vols. (Ankara, 2002) .
- ²⁹ 執筆の背景については、W. Treadgold, “Observation on Finishing a General History of Byzantium,” (Leipzig, 1998) , 342-353.
- ³⁰ W. Treadgold, *Late Ancient and Byzantine History Today, Historically Speaking* III-4 (2002) , 20-22. (introductory part: <http://www.bu.edu/historic/hs/april02.html>)
- ³¹ 上掲誌サイト (<http://www.bu.edu/historic/hs/september02.html>)
- ³² Review of “Warren Treadgold, *Byzantium and Its Army, 284-1081* (Stanford University Press, 1995) ” by W. Kaegi, *Speculum* 74-2, (1999) , 521-524. ケーギ先生は古代史およびビザンツ研究の中で根強い人気の軍事・戦略論研究でも知られ、J. Haldon 氏や M. Bartusis 氏の先輩格でもある。シカゴ大で「ビザンツ通史」「ビザンツ—イスラム史」の講義に加えて、「戦略論」の講義もされている。
- ³³ Sp. Vronis, “The Decline of Medieval Hellenism in Asia Minor and the Process of Islamization, the Book and its Reviews Ten Years Later,” *Greek Orthodox Theological Review*, 22/2 (1982) , 225-85.
- ³⁴ 昨今の米国ビザンツ学内での論争は、先の経済史のそれとともに、J. Howard- Johnston の「アンナ・コムネナが本当に『アレクシアス』を書いたのだろうか？」という問題提起を挙げられる。J. Hemin 氏の皇妃論は、ビザンツ世界における女性史研究の最新のものである。ただ皇妃や皇族をジェンダーとしての女性と扱えるかどうかで議論が分かれる (R. Niyogi 氏の報告に基づく)。J. Herrin, *Women in Purple : Rulers of Medieval Byzantium*, (Princeton, NJ, 2001) ; J. Haward-Johnston, “Anna Komnene and the *Alexiad*,” *Alexios I Komnenos* edited by M. Mullet and D. Smythe (Belfast, 1996) , 260-302; *Anna Komnene and Her Times*, edited by Thalia Gouma-Peterson (New York, 2000) .私見として私のテーマでもある「他者を見る眼」の研究が、若手の間で広まりつつあるのが興味深い。T. Kolbaba 氏や N. El-Cheikh 氏など。